スポーツ文化の風を発信する

学報 NITTAIDAI

35

2013.Summer

国際舞台への挑戦

巻頭 学長エッセイ「国際舞台への挑戦 ～若者よ、国際平和の使者たれ!～」――1
特集■国際舞台への挑戦――2
第27回ユニバーシアード競技大会で本学学生が活躍――9
新任教員紹介 & メッセージ――11
「体育科学をリードする」 ～大学院・研究科の取り組み～――13
平成26年度入試が本格スタート――15
クラブ情報●2013年度上半期クラブの主な大会成績――17
NEWS●2013年度上半期ニュース――18
INFORMATION●dot.NITTAIDAI――19

NSSU
Nippon Sport Science University

唯一の日本人大リーグコーチとして活躍する、百瀬喜与志氏

際舞台への挑戦

東京が、2020年オリンピック・パラリンピックの開催地に決定した。
スポーツへの期待、日本への期待が、かつてないほど高まっている。
スポーツに国境はない。技と技、魂のぶつかり合いが人の心を一つにする。
スポーツは世界をむすぶ絆、世界共通の文化である。
日体大関係者も、オリンピックはもとより、
WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）、サッカーワールドカップをはじめ、
多くの国際舞台で活躍している。
彼らがそこで何を見て、何を感じたか。
刺激的な体験談を通して、異なる文化・価値観について理解を深め、
自分の視野や可能性を広げてほしい。
世界を身近に感じた時、真に未来を生きるプレイヤー（社会人）となる。

学長エッセイ

国際舞台への挑戦
～若者よ、国際平和の使者たれ！～

日本体育大学
日本体育大学女子短期大学部
学長　谷釜（たにがま）了正（りょうしょう）

一昔前に比べて、海外での活躍を志す若者はめっきり減ってしまったといわれています。その一方でスポーツの世界では活躍の舞台を海外に求めるアスリートは年々増えてきているように思います。各種のメディアは彼らのプレイを追いかけ、その活躍ぶりを報じています。しかし、かつてはスポーツの先進国へ武者修行にでかけて、そこで培った数々の技術や知見を母国に持ち帰り、スポーツの普及と振興を図った開拓者（つわもの）たちがいたことを忘れてはなりません。

スポーツの先進国となったいま、私たちには国際スポーツの周縁にある途上国に体育やスポーツを運ぶ使命があります。すでに、この使命を担って開発途上国に出向き、スポーツのパイオニアとなった同窓は少なくありません。先輩たちに続いて先進諸国にはみられない異文化に触れ、差別（さべつ）のわかる世界を発見して、平和な国際社会を実現するという野望を企ててみようではありませんか。未来（あす）を拓くには若い力が必要です。皆さんの大いなる挑戦を期待します。

WBCで世界を支えたトレーナーたち

ワールドベースボールクラシック(World Baseball Classic)は、メジャーリーグ(MLB)や日本野球機構(NPB)などのプロ野球選手も含めた代表チームが世界一をかけて争う、野球のナンバーワン決定戦。今大会は2013年3月2日～3月20日(日本時間)に、日本(東京ドーム、ヤフオクドーム)、台湾、プエルトリコ、米国を舞台に開催され、世界から28の国と地域が参加。ドミニカ共和国が初優勝を果たした。日本代表は決勝進出をかけたプエルトリコ戦で敗れ、3連覇はならなかった。

最終順位
1位 ドミニカ共和国
2位 プエルトリコ
3位 日本

4位：オランダ／5位：キューバ／6位：アメリカ／7位：イタリア／8位：チャイニーズタイペイ／9位：韓国／10位：ベネズエラ／11位：メキシコ／12位：カナダ／13位：中国／14位：ブラジル／15位：スペイン／16位：オーストラリア
(予選敗退)イスラエル、ドイツ、パナマ、ニュージーランド、南アフリカ、イギリス、コロンビア、フィリピン、フランス、チェコ、ニカラグア、タイ

百瀬 喜与志 氏
WBCにドミニカ共和国コンディショニングスタッフとして参加

2013WBCは、私の野球人生の中で最もエキサイティングな出来事だった。

百瀬喜与志氏プロフィール／1995年、体育学部体育学科卒業後、中米・コスタリカ共和国にて青年海外協力隊員として活動。その後、University of Central Florida(米国)修士課程にて運動生理学を学ぶ。タンパベイ・デビルレイズマイナーリーグを経て、現在、ピッツバーグ・パイレーツ、アシスタントストレングス＆コンディショニングコーチ、ラテンアメリカ コンディショニングコーディネーターとして活躍。唯一の日本人大リーグコーチ。

日体大の学生、関係者の皆様、こんにちは。私は15年余り米国に在住し、メジャーリーグ・マイナーリーグを舞台にストレングス＆コンディショニングコーチとして活動しています。選手の適切なトレーニング・食事・体調の調整方法などをサポートする仕事です。

まず今回、WBCでドミニカ共和国チームに帯同することになった経緯をお話ししたいと思います。メジャーリーグ機構から、プエルトリコで行われた第一ラウンドにおいて、ドミニカ、プエルトリコ、ベネズエラ、スペインの4チームのサポートをするように要請を受けました。実際は、ドミニカを除いてはそれぞれの国にストレングス＆コンディショニングコーチがおり、そんなことからドミニカの選手の面倒をほぼ付きっきりで見るようになります。一次予選でピッツバーグ・パイレーツのスプリングトレーニングに戻る予定でした。そして、ドミニカが第一次予選通過。ドミニカの監督、選手らに戻らないでくれと言われて、パイレーツから許可をもらい引き続き帯同。さらに第二ラウンドになって、決勝までいっしょに来てくれとドミニカチームのGMまで乗り出してきて、結局最終ラウンドまでお手伝いしたわけです。そのおかげで、非常にエキサイティングな試合を見ることができました。私の野球人生の中でも一番印象に残る出来事になったと思っています。

日体大卒業後、私は青年海外協力隊の野球隊員として、2年間コスタリカ共和国で少年野球の指導にあたりました。先輩達が継続的に派遣されていたこと、そして自分自身も海外を見てみたいという思いを持っていたこともあり、応募して採用されました。もともと体育教員を目指していましたが、いろいろな方と出会いお話しする中で、視野を広げたいと思うようになったのです。コスタリカでは、やはり文化や違いに戸惑うこともありました。練習開始時間に誰も来ない。30分遅れで半分ぐらい、1時間遅れでようやく揃うといった具合です。日体大の厳しい寮生活で鍛えられ、それが当然と思っていた私は、時間があまりにルーズなことに正直苛立ちを覚えたこともありました。スペイン語にも苦労しました。ホームステイ先の家族がとてもよくしてくださり、語学学校から帰ってからも勉強に付き合ってくれました。コミュニケーションがとれるようになるとすごくうれしいですし、もっと頑張ろうと意欲が湧いてきました。その後、さらにトレーニングについて勉強したいと思い、米国セントラルフロリダ大学へ。インターンシップなどを通して、ピッツバーグ・パイレーツにお世話になり今に至ります。

私は米国の野球も日本の野球も両方とも好きです。高い身体能力を持ちパワーとパワーがぶつかり合うダイナミックな米国の野球。一方で、チームの連携を重視する日本の野球は技術的には世界一と言って過言ではありません。それぞれ醍醐味があります。いろいろな野球、選手を見ることができたのが、私の財産になっています。

もちろん私もどこかのタイミングで日本で活動する選択肢もありました。しかし、あえてやりたいことを貫きました。夢はピッツバーグ・パイレーツがワールドシリーズに出場しその勝利に貢献すること。そして、ヘッド・ストレングス&コンディショニングコーチになること。今はどこにいても世界中の情報が手に入る時代です。だからこそ、それに満足せず、どんどん海外に出て挑戦してほしい。不安はあると思いますが、腹を決めて挑めば、必ず道は開けます。トレーナーを目指す皆さんも、国内でもいろいろなチャンスがあります。他大学や現場で活躍する諸先輩と積極的に交流を持ち、知識や技術を吸収してください。日本と世界の野球界、スポーツ界、そして国際交流を支えるのは皆さんであると大いに期待しています。

WBC

恐れず、開いてほしい

対談：アスレティックトレーナー・指導者、その挑戦を語る～

野球日本代表チーフトレーナー　河野 徳良 准教授
第3回WBCブラジル代表チームコーチ　黒木 豪 氏

野球日本代表チーフトレーナーとして、シドニーオリンピック・アテネオリンピック、北京オリンピック、WBC等に帯同した河野徳良准教授。第3回WBCブラジル代表チームコーチを務めた黒木豪氏。お二人は留学や国際ボランティア経験も持つ。海外での武者修行で何を学んだのか。国際舞台にチャレンジすることの魅力を語ってもらった。

野球日本代表チーフトレーナー
河野 徳良 准教授

1988年、体育学部卒。インディアナ州立大学院（米国）修了。
日本体育協会公認アスレティックトレーナー
全米アスレティックトレーナー協会公認アスレティックトレーナー（ATC）
日本アスレティックトレーニング学会評議員、日本オリンピック委員会強化スタッフ（野球、バドミントン）、日本体育協会アスレティックトレーナー連絡会議運営委員、東京都アスレティックトレーナー連絡協議会副会長、全日本野球協会選手強化本部医科学部会委員、日本バドミントン協会トレーナー部会長ほか。国際舞台での活躍多数。

WBCのライバルが日体野球部を率いる

―今春に開催されたWBC（ワールドベースボールクラシック）で日本代表とブラジル代表に分かれて「戦った」お二人ですが、以前から面識などはあったのですか。

河野　黒木さんの日体時代の活躍は当然知っていたのですが、その頃に直接指導することなどはありませんでした。ですから、卒業後共通の知人を介して黒木さんと知り合うことになりました。

黒木　WBCでは違うベンチにいたのに、今年からは野球部の部長とコーチという関係ですので、不思議な感じがしますね。

河野　黒木さんは、現在はコーチとして私（部長）や監督と選手の間に入って、いい兄貴分として活躍してくれています。わずか数年前かもしれませんが、黒木さんの現役の頃と比べて学生たちの気質みたいなものは変化していますか？

黒木　私たちの頃よりもしっかりとして芯を持ちつつも、色々な意見に耳を傾けることなど、気質が柔軟になっているという感じがしますね。

河野　確かにそれは感じますね。それは黒木コーチの頑張りも大きく影響しているように思いますが（笑）。

なぜ、海外に挑んだか？

―黒木さんはブラジル代表のコーチとしてWBCに出場しましたが、ブラジルに渡る経緯を教えてください。

黒木　大学卒業後は横浜市内の中学校で非常勤講師として勤務していました。その中で自分の人間としてのキャパシティの無さというか、子供たちと向き合うにあたっての力不足のようなものを感じていたのです。そこで大学時代の恩師の勧めもあって、JICA（国際協力機構）を通じてのブラジル行きを決意しました。

河野　私も29歳のときに一念発起してアメリカへ渡りましたが、ブラジルでも様々な苦労があったのではないですか？

黒木　そうですね、JICAで事前に2ヶ月ほどポルトガル語を学んでいったのですが、実際に行ってみるとほとんど通じない。常に辞書を持ち歩いている感じでしたね。もちろん習慣や生活スタイルなど戸惑ったことを挙げたらキリがないです（笑）。

河野　私も英語が最初はほとんど出来なかった。その中でも自分の日本でやってきた実力を認めてもらえるよう、それまでの経験で培ったテーピングやストレッチングなどアスレティックトレーナーとして必要な技術を授業では一生懸命ぶつけ、テストでもアメリカ人に負けませんでした。アメリカでは自分をアピールしないと周囲に認められることはありません。そんな風に「あがいて」いると自然と言葉も身に付き、周囲からも認めてもらえる様になりました。

―ブラジルと言えばサッカーのイメージが強い中で指導も苦労したんじゃないですか。

黒木　笑い話かもしれませんが、打ったら三塁ベースへ走る、バットの使い方が分からない、ボールを蹴ってしまう…日本では大前提であるルールの理解がブラジルでは通用しないということは普通にありましたね。ただそんな環境でも指導をすることで日々、選手たちの成長を感じ取れることに充実感がありました。

WBC日本×ブラジル もう一つの戦い

―そして黒木さんはブラジル代表のコーチとしてWBCで日本と対戦しますね。

黒木　ブラジルでは子供たちから学生年代のチームの指導を続けていたのですが、昨年の夏に突然ブラジル野球連盟の方から「ナショナルチームのコーチをやってくれないか」とオファーされました。もちろん驚きもありましたが、翌春には日本に戻ることを決めていたこともあり、最後にブラジルに恩返しをしたいという思いから、コーチに就任しました。

困難を世界への扉を

第3回WBCブラジル代表チームコーチ
黒木 豪 氏

2008年、体育学部卒。
横浜高校では4番打者として活躍。2003年春の選抜高校野球大会準優勝。日体大では1年春から4番指名打者（DH）でデビュー。ベストナインに選ばれる。卒業後、横浜市立中学校に非常勤講師として勤務。2009年、JICA日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ。サンパウロ市の北西約100キロにあるインダイアツーバ市で、少年野球チームの指導を任される。2010年、ブラジル代表チームの打撃・走塁コーチに就任。2013年のWBCを機に帰国。現在日本体育大学学生支援センターキャリア支援部門に所属。

河野　私もその話を聞いていたのですが、翌年まさか福岡で日本代表チームと戦うとは思いませんでしたね。ブラジルはＷＢＣ初出場ですし、予選では強豪パナマを破らなければいけない。正直私はパナマが予選を通過し日本と対戦すると思っていました（笑）。

黒木　今だから言えますが（笑）、コーチの立場からもパナマに勝つのは厳しいかなとは思いました。パナマにはＭＬＢで活躍する選手がズラリと並んでいましたから。しかし、ブラジルの選手たちはまったく気持ちで負けていなかった。あのときは感動させられましたね。

河野　そして本戦出場を決めたあとで、日本代表の宮崎キャンプの際に挨拶に来てくれたんですよね。黒木さんの高校時代の後輩、涌井投手（西武ライオンズ）も黒木さんが敵になったことに驚いていたよね。

黒木　「スパイ」とか言われたりして（笑）。でも、正直日本には胸を借りるつもりで、出来ることを精一杯やってくれればいいと思った程度で、対戦するという実感が涌かなかったですね。

河野　日本代表としても、ブラジルには「負けられない」というより、「負けない」という意識が強かったかな。しかし実際の試合は日本にとっては意外な展開でした。７回までは２－３で負けていて、何とか８回に３点取って勝てた。あの時は選手たちもホッとしていましたね。

黒木　選手たちが日本の大観衆の前でブラジルの野球の可能性を見せてくれて本当に感動させられました。私個人としても試合前の君が代をブラジルのベンチ前で聞くという、素晴らしい経験をさせてもらいました。

可能性を限定せず果敢に挑戦を

―今後も多くの学生がお二人のように海外へ留学やボランティア、仕事などで日本から出て行くと思いますが学生たちにメッセージをお願いします。

河野　とにかく自分自身の能力を信じ、勝手に能力の限界を決めつけないこと、そして目標が達成するまでぶれない気持ちを持ち続けチャレンジしてほしい。私も黒木さんも語学が出来なくても外国へ行こうと思った。チャレンジするという気持ちを大事にしてほしいと思います。

黒木　おっしゃる通りですね。自分で可能性を小さくすることはしないで欲しいと思います。私は学生たちのキャリア支援をする立場ですが、日体生の良いところはコミュニケーション能力が高いという点ではないでしょうか。コミュニケーションが取れるということは、実は社会に出ると素晴らしい利点になると思います。まずはチャレンジする気持ちを忘れてほしくないですね。

河野　日体生はスポーツを通じて、勝つことの喜びはもちろんですが、負けることの挫折も知っています。スポーツをしている人間で負けたことが無いという人はいません。すなわちスポーツにおいて挫折を経験し、それを乗り越える術を身につけようとすることを既に行っているのです。海外での経験は当然のことながら想像以上の挫折も待っています。しかし、その壁を乗り越えたときには自分の想像以上の能力を身につけているものです。

黒木　私がブラジルで学んだことは沢山あるのですが、一番印象に残っているのが彼らはどんな事にも自分の意見を持っているという点でした。そして自らの意見を大事にすると同時に、他人の意見にも耳を傾けることを心がけています。学生の皆さんの人生の選択においても沢山の道が用意されていると思います。そのオファー、選択肢に対して自らが選んだ道に、一生懸命に取り組むこと、そして周囲の人への感謝を忘れないこと、そして最後は勇気を持って決断すること、バイタリティー溢れる日体の学生ならば出来ると思います。

河野　結果的に私も黒木さんもそうだったかもしれませんが、目の前に２つの扉があるとしたら、多くの人が開ける扉より逆の扉を開けてみてほしいですね。もちろん、そこは困難なことが待ち構えているかもしれませんが、その分野に関しては自分がパイオニアになれる可能性があるのです。最近、日本という国、日本の文化、そして日本人は世界から「ｃｏｏｌ」と評価されてきています。これらはオリジナリティー追求の歴史の結果だと考えます。常に追求を忘れることなく自分の力を信じ前へ進み続けてほしいと願っています。

国際舞台への挑戦

トレーニング、日体大 WBC

自分の可能性や視野を広げるために、いま何をすべきなのか。お二人のOBに話を聞いた。

日々の積み重ねが、世界へと通じる

読売巨人軍　トレーナー　鬼頭 健介 氏

―まず、WBCに帯同した感想をお聞かせください。

今回は2回目の参加だったので、緊張はあまりなかったです。現地では時間的なこと、私たちが入れない場所など制約が多くあり、それを認識しておかないと、うまく仕事ができません。でも、今回は前回の経験があったので、スムーズにできたと思います。一番よかったと感じたのは「負けたらおしまい」という一発勝負に賭ける選手の気迫を感じたり、緊張感に包まれた選手の顔を見ることができたりしたことです。選手たちはいつもとは違う表情をしていたのが印象的でした。

―前回と今回で大きく違ったことはありましたか?

私たちはWBCのオフィシャルではなく、あくまでも外部のスタッフであり、WBCに参加している自分のチームの選手のケアをすることが僕たちの仕事です。ですからマッサージをする場所が与えられている訳ではないので、ホテルの部屋にマッサージルームをつくりそこで選手のケアをしたり、試合はベンチではなくスタンドで見たりしていました。試合の直前まで選手のケアをしたいと考えているスタッフには、そのことにジレンマに感じる人もいたかもしれません。しかし私は前の経験があったので、冷静に対応できました。

―そんな中で、最も力を注いだことは何でしょう。

WBCでは自分ができることは何でもやろうと考えていました。普段の試合なら、選手に自分でやってもらうような細かなことも自分がやり、選手には野球に集中してもらうようにしました。私の仕事はケガなく選手をグランドに送り出し、その期間ずっとケガをしないようにケアをすることだと考え、そのことに集中していました。もちろん、オフィシャルのトレーナーの方とは連絡を密にし、選手の状態はしっかり伝えるようにしていました。私が初めて国際大会に参加したのが北京五輪でした。その頃は、自分が関わった選手には活躍してほしいという思いが先走ったようなところがありました。でも、自分の役割は選手に活躍してもらうための技術を教えるのではなく、選手を怪我なくグランドに送り出すことだと認識するようになりました。それがわかったので、今では何をどうすべきかがはっきり見えています。優秀な選手たちはコンディションに問題がなければ自ずと結果を出してくれますから。

―世界との差や違いなどは感じましたか?

日本はすごいなと思いました。特に前回はしっかり勝ち切り優勝しましたしね。今回は惜しくも敗れましたが、それは日本は追われる立場になり、つまり、日本が世界の目標になったということですから。プエルトリコが日本に勝ったとき、プエルトリコの選手はすごく喜んでいました。彼らにとって世界一への目標の1つを達成したからでしょう。そのとき、WBCはアメリカや日本などだけが優勝争いをするのではない、世界的な大会に成熟したのだと実感しました。

―さて、野球に限らず他の競技、あるいはトレーナーなどとして、世界を舞台に仕事をするためにはどんなことが大事でしょう?

世界を目指すという向上心を持つことは大事だと思いますが、まず日々の仕事など、目の前のことをしっかり続けていくことの方が大事だと思います。日々の延長線上に海外の舞台が待っているのですから。目標をしっかり認識しつつ、今ある仕事を出来る限り一生懸命にすることが世界への第一歩となるのではないでしょうか。

―最後に日体大生へメッセージをお願いします。

日体大は素晴らしい先輩方が多くいらっしゃいますし、特にスポーツ界では日体大生であったことをありがたく思う場面が非常に多くあります。ですから、日体大の学生であることを誇りに思ってください。その誇りを胸に、これから皆さんが入っていく社会は素晴らしい世界であることを楽しみにしてほしいです。そして、日々のことに全力で取り組み、充実した日体大生生活を送ってください。

2000年、体育学部卒。大学在学中、硬式野球部に所属し、野球部のチームトレーナーとの出会いからスポーツトレーナーを志す。2003年卒業後、医療系の専門学校へ進学。鍼灸マッサージ師の免許取得。2003年より、読売巨人軍トレーナー。2年間の2軍でのトレーナー活動を経て2006年から1軍トレーナーとしてチームに帯同。2008年の北京五輪をはじめ、2009年、2013年のWBCなど、国際大会でのトレーナー経験を持つ。

世界舞台で見た野球、日体大、日本の良さを誇りに

WBCではトレーナーとして本学OBが参加した。大舞台で何を見て、感じたか。

東京ヤクルトスワローズ　トレーナー　小林 宏平 氏

―WBCの印象はいかがでしたか？

以前、テキサスレンジャーズで仕事をした経験があるので、それほど緊張や驚きはありませんでした。ただ、選手一人ひとりのレベルの高さ、能力の高さ、あらゆる面で手際のよさなどはWBCでも実感しました。

―WBCで心がけたことは何でしょうか。

私はWBCのオフィシャルトレーナーではなく、ヤクルトから参加している選手のケアをするのが仕事でした。ですから、球団の選手の体の状態を適切に管理するのが任務です。選手の状態についてはしっかりとケアをし、報告・連絡・相談を特に心がけました。選手の状態がチームのパフォーマンスを左右するので選手の体調には気を配りました。選手あってのトレーナーであり、選手をバックアップするのがメインで自分は表には出るものではないと考えています。例え気持ちは熱くても、平常心でいるようにしています。「冷静と情熱の間」という言葉をいつも胸に持っています。

―そのようなトレーナーとしての考え方は、どのようにして身につけられたのですか。

私の場合は、日体大で学んだことがベースになっているのは間違いありません。現場の経験をすればするほど、日体大で学んだことが大きかったことを実感しています。海外に憧れて海外に出る人も多いようですが、私の場合は日本で学んだことでも十分やっていける、それほど遜色ないと強く感じました。逆に日本の方がきめ細かくやっていることも多くあります。それからインターンシップで参加したテキサスレンジャーズでの経験も大きかったのではないでしょうか。どこでも、どんな状況でもやっていけるという度胸はそのときについたと思います。

―海外での経験から、日本と海外との差、また日本のよいところはどのようなところだとお考えですか。

まず、英語が通じなかったのがショックでした。自分なりに英語は勉強して行ったのですがダメでした。正しい英語を話さないといけないと思い込んでいたのでしょう。でも、あるときから多少文法は間違っていてもいいと思い、勇気を持って話すようになると、どんどん通じるようになりました。大事なのは正しい英語を話すことではなく、コミュニケーションを取ることですから。

また、トレーナーとして一番印象的だったのは、アメリカの選手たちがトレーナールームに来ないことです。トレーナールームに行くということは何らかの問題があると思われ、故障者と見なされるので選手にとっては死活問題です。その一方、日本は選手のコンディションを第一に考えますから状態が少しでもよくないとトレーナーが細かくケアをします。日本の選手を大事にする考えは非常にいいですね。そういえば、東日本大震災のとき、私はアメリカにいましたが、大災害のなかでの取り乱すことない日本人の振る舞いについていろいろな人から賞賛されたんです。それが日本人としてとても誇らしく思えました。ですから、私はある意味で、日本代表として行動すべきだと考えるようになりました。トレーナーの技術、選手を守る環境、野球に限らずいろいろな面で、日本は誇るべきものがすごくたくさんあると思います。私たちが気づかないだけなのです。

―海外でリアルな経験をされているからこそ、日本を客観的に見ることができるのでしょうか。では、最後に日体大生へのメッセージをお願いします。

日体大には素晴らしい施設がそろっています。そのことをまず理解してほしいのです。しかし、それに甘んじることなく、設備や環境が整わないところでも、しっかりできるスキルを身につけてください。また社会人になると理不尽とも思えることがあると思います。でもそれは理不尽なことではなく、その社会の文化です。それを知り、受け入れることが社会では重要です。日体大では社会に入る前にきれいごとではない「リアルな社会」を経験することができると思います。そんな経験はなかなか他ではできないことです。だから、日体大で学んでいる学生の皆さんは、日体大のよさを改めて感じてほしいと思います。

2003年、体育学部卒。
新発田農業高校時代、春夏甲子園出場。トレーナーを目指して日体大入学。JBATS主催のアメリカ・メジャーリーグのインターンシップにも参加し、テキサス・レンジャーズにて研修を受ける。（株）メジャー・トレーナーズ入社。コンディショニング プログラム ディレクターとして活躍。2013年1月、東京ヤクルトスワローズのトレーナーに就任。

体を動かす喜びを世界中に広めていきたい

～世界から見た体操。国際舞台で得た経験・交流～

大学業務のほか、精力的に海外に赴き、一般体操の普及・指導者養成に取り組む荒木達雄教授。世界体操祭をはじめとするビッグイベントの開催、国際会議での講演等の豊富な経験も持つ。海外だからこそ経験できる感動、刺激がある。学生ももっと海外経験を積んでほしいと話す。世界の体操事情、海外における活動の様子やそこで感じたことを聞いた。

荒木 達雄 教授

1977年、体育学部卒。(公財)日本体操協会理事・一般体操委員会委員長、国際体操連盟(FIG)一般体操委員会副委員長、アジア体操連盟(AGU)一般体操委員会委員長。国内のみならず、海外でも体操の普及と指導員の養成に従事。また、世界体操祭を主催するなど、イベント開催等による幅広い視点で体操の啓発に努めている。学校体育はもとより、職場や家庭、子どもから高齢者、障害者まで、活動対象は多岐にわたる。音楽や古典芸能とのコラボレーションにも挑む。

大学卒業後初めてドイツへ。現在は世界を飛び回る日々

―まずは先生の学外での活動内容を教えてください。

国際体操連盟(FIG)一般体操委員会副委員長を、アジアにおいてはアジア体操連盟(AGU)一般体操委員会委員長、そして国内では公益財団法人日本体操協会(JGA)一般体操委員会委員長を務めています。それぞれのフィールドにおいて、一般体操の普及と指導を行うことが基本的な役割です。また世界最大の体操イベントである世界体操祭(次回は2015年フィンランドで開催)やコンテスト世界大会等を主催することも大事な仕事です。現在では学内での授業の合間をぬって海外での会議や講習会を実施しています。特にアジア諸国での一般体操の指導者育成に力を入れています。毎年、平均すると3ヶ月から4ヶ月ぐらいは海外で仕事をしていることになりますね。

―それだけ海外での仕事が日常的である荒木先生ですが、はじめて海外に行かれたのはいつでしょうか。

24歳の時です。大学を卒業後、お金を貯めてドイツ・デンマークへ行きました。ドイツ体操祭という世界でも有数の体操イベントを、もちろん参加することではなく見学に行ったのです。日本では到底考えられないような規模の体操祭を目の当たりにして、とにかく驚いたことを今でも思い出します。そこで、日本の体操における考え方や取り組み方において歴史の違いを肌で感じる機会になりました。言わばカルチャーショックのようなものを受けました。体操祭以外では時には旅行者特有の危険な目に遭うなど、日本の安穏とした日々では得られないような経験が出来た旅でした(笑)。まさか、その後現在のように日本と外国を行き来して一般体操の仕事をするようになるとは想像出来なかったです。

―ドイツへ留学された際に言葉や生活面の不安などはなかったでしょうか?

もちろんなかったことはないですが、語学において私は小学生のころから洋楽(ロック)を聴いていました。「英語の先生はロック・ミュージック」と言っても過言ではないくらい毎日聞き込んでいました。だからヒアリングには自信があったんですね(笑)。とりあえず英語が出来たことで、ドイツ語が覚えられなくても何とか不自由なく授業を聞くことができました。生活面では戸惑うこともありましたが、そこも新しいものへの挑戦だと思い、乗り越えることが出来ました。

2013ドイツ国際体操祭：体操部員と松浪理事長

FIG（国際体操連盟）一般体操委員会メンバー

世界中の指導者、スポーツを愛する人々との交流

―現在の世界各国での一般体操への取り組みなどを教えてください。

いわゆる一般体操というのは「順位や優劣を決めることはなく、競技をしないすべての体操」を指します。すなわち子どもからお年寄りまでいかに楽しく、体を動かすかということを目的としています。日体大での授業では「体つくり運動」です。人間の健康を考えるにあたって、体を動かすことが良いことだということは世界中で当然のように認識されていると思いますが、どのように動かせばいいのか分からない方もまだまだ多くいます。そのきっかけ作りとして世界中で一般体操の指導者の養成が求められています。私も日本はもとより、現在はネパールやインドネシアなどアジア各国に何度も足を運んで現地の一般体操指導者を育成しています。歴史的にはヨーロッパの国々がパイオニアとされてきましたが、現在、日本はヨーロッパと肩を並べるまでになっています。

―そのような先生の活動の中でも3年前のフィンランドでの講演が特に印象に残っていますが。

２０１０年６月にフィンランドで行われたＩＯＣ主催のスポーツ・フォー・オール国際会議ですね。私は日本人としては初めてゲスト・スピーカー（特別講演者）として招待されました。92カ国から５００人以上の方が出席されていたと覚えています。２００６年から日本農業新聞で連載をしていた「かろやか体操（農家における体操）」がＦＩＧのホームページに掲載されたことが招待のきっかけになりました。講演テーマを「誰でも易しく楽しみながら運動する勧め」としました。30分の講演だったのですが、学会における従来のスタイルである発表講演のみではなく、何かユニークなアイデアを盛り込んでもらいたいと会議主催者側からリクエストがあったので、体操についての講演だけではなくスポーツフォー・オールの原点である「みんなが楽しんで身体を動かす」ことを盛り込むことにしました。その基本である運動実施サンプルを、本学広報課の皆さんの協力を得て、簡単な体操を実演してもらいＶＴＲ撮影を実施。その映像を講演の終盤に実際に上映し、参加者にも同じ条件で運動してもらったのです。多くのＩＯＣ委員の方が楽しそうに体を動かしてくれました。会議終了後、主催者の方が「従来の国際学会の枠を脱却した」と評価してくださり、とても喜ばしい気持ちになりました。

海外だからこそ得られる経験、本物の感動を学生にも

―世界中を飛び回る中で、一般体操以外でも多くのことを感じると思いますが。

もちろん行く先々で様々な経験をします。そこには文化や習慣の違いもあり、戸惑うこともあります。しかしながら人間として成長することができるのも海外の良さです。私が外国へ行って一番感じることは、「日本の良さ、日本人の良さ」です。日本人は規律を守り、ホスピタリティに溢れ、かつマナーや自分たちの文化を大切にすることが出来ます。なかなか普段、日本の中だけで生活をしていると気づかないことですが、自分たちが思うよりも世界の人たちから尊敬を受けるようなことが多いと思います。日本社会が萎縮していると言われますが、自信を持てるようなことがあるということを学生たちにも忘れてほしくないですね。

―先生が指導する体操部も毎年海外へ遠征していますが。

海外での体操祭やイベントに参加して国際交流の体験をしてもらいたいと考え、毎年実施しています。今年はドイツ国際体操祭とシンガポールで開催されるアジア体操祭です。多くの学生たちが、様々な感動を持ち帰ってくるのですが、その中でも多く聞かれるのが「もっと語学を勉強しておけば良かった」ということです。ホームステイ先で上手く自分の意思が伝わらない経験も、後には自分の人生の財産になると思います。今後も学生たちには海外での経験を多く積んでほしいと願っています。

―約35年前に初めて海外に行かれたときと現在では大きく世の中が変化しました。

インターネットの普及など、情報が多くなったことは良い部分も悪い部分もあるでしょう。私がドイツへ初めて行った際には何の情報もありませんでした。ですから当時の私からすれば今の状況は羨ましいかぎりです。今では体操祭と検索をすれば世界中の体操祭の様子が映像ですぐに観られる環境にあります。でも私の頃は行かないと分からない。だからこそ得られる感動もあったと思います。今の学生たちには情報だけでお腹いっぱいにならず、是非自分の体や目で「事実」を確認してほしいと思います。

―今後、先生はどのような活動を続けていくのでしょうか。

現在の活動状況と大きく変わることはないと思います。体を動かす喜びを世界中に広めていきたいと思います。またそのことを伝えられる指導者を本学のみならず世界中に作りだしていきたいと考えています。

IOCスポーツ・フォー・オール国際会議

インドネシアでの指導

（ロシア／カザン）

アード競技大会で本学学生が活躍

「学生のためのオリンピック」とも呼ばれるユニバーシアード競技大会。世界トップレベルの学生アスリートが集まるこの大会で、本学学生が大活躍し、日本のメダル獲得に貢献した。これまでも、これからも、スポーツは国際交流で主要な役割を担う。本学が原動力となり、世界に感動を、喜びを、友好を広げていきたい。

Universiade

第27回ユニバーシアード競技大会は7月6日から17日まで、ロシア・カザンを舞台に開催された。

本学関係者からは、選手49名、監督・コーチ等スタッフ26名、総勢75名が参加・出場した（本学広報課調べ）。大会に先立ち、東京・世田谷キャンパスにおいて6月29日に壮行会を実施。谷釜了正学長らの激励に続き、複数回ユニバーシアード出場経験のある森田淳悟教授（学友会会長）が「ユニバーシアードは2年に1度であり、選手の顔ぶれが変わることが多い。すると他の大会に比べて相手の力が読めない。そういった状況では敵は周囲でなく自分。自分自身との戦いになる」とアドバイスを込めたエールを送った。

これに応えて、ロンドン五輪でも活躍したシンクロ代表・箱山愛香さんと糸山真弓さん（ともに体育学科4年）が挨拶。「オリンピックで世界の壁を実感。同時に成長できた大会だった。ユニバーシアードでは日体大の代表としてメダルを取りたい」と力強く意気込みを語った。

今大会において本学学生は、競泳、陸上競技、シンクロナイズドスイミング、サッカー（男子）、バレーボール（男子）、体操競技（女子）、レスリング、柔道で、合計20個のメダルを獲得（金＝5、銀＝10、銅＝5　※団体・チーム等含）。このうち、競泳チームが7月24日に、柔道チームが7月26日に、学長・理事長に対して大会の報告を行った。

第27回ユニバーシアード競技大会

ユニバーシアード競技大会は、国際大学スポーツ連盟（ＦＩＳＵ）が主催する学生を対象にした国際総合競技大会で、2年ごとに開催される。第27回大会は、１６３の国・地域から1万人を超える選手が参加。日本からは19競技４１１名の選手が参加した。日本勢はメダル総数でロシアに次ぐ84個（金＝24、銀＝28、銅32）を獲得。過去最高だった前回の深圳大会の87個には及ばなかったが、金メダル数は最多だった１９９５年福岡大会に並んだ。次回28回大会は、韓国・光州で開催される予定。

学長・理事長報告参加選手

競泳
小関　也朱篤（体育学科4年、１００ｍ平泳ぎ　金メダル、４００ｍメドレーリレー　銀メダル）
藤森　太将（体育学科4年、男子２００ｍ個人メドレーリレー　銀メダル）
小口　綾乃（体育学科4年、１５００ｍ自由形　6位、４×２００自由形リレー　6位）
清水　咲子（体育学科3年、４００ｍ個人メドレー銅メダル、２００ｍ個人メドレー4位）
藤森　文晴（体育学科2年、４００ｍ個人メドレー　銀メダル）

柔道
木戸　慎二（武道学科卒、男子60キロ級　金メダル、団体　金メダル）
下和田　翔平（武道学科卒、男子団体　金メダル）
高上　智史（武道学科4年、男子66キロ級　金メダル）

メダルラッシュ！ 第27回ユニバーシ

■第 27 回ユニバーシアード競技大会　代表選手および結果

種目	学年	氏名	結果
陸上競技	4 年	服部　翔大	男子 10000m　6 位、男子ハーフマラソン　5 位、男子ハーフマラソン団体　銀メダル
競泳	4 年	小関　也朱篤	100m 平泳ぎ　金メダル、400m メドレーリレー　銀メダル
	4 年	藤森　太将	男子 200m 個人メドレーリレー　銀メダル
	4 年	小口　綾乃	1500m 自由形　6 位、4 × 200 自由形リレー　6 位、女子 400m 自由形　予選 12 位、女子 800m 自由形　予選 10 位
	3 年	清水　咲子	400m 個人メドレー　銅メダル、200m 個人メドレー　4 位
	2 年	藤森　丈晴	400m 個人メドレー　銀メダル
水球（男子）	卒業生	角野　友紀	6 位
	卒業生	竹井　昂司	
	4 年	志賀　光明	
	4 年	逸見　優太	
	4 年	松田　悠	
	4 年	吉満　隆彰	
	3 年	近野　洋平	
	2 年	荒井　陸	
	2 年	菅根　大樹	
	2 年	福島　丈貴	
水球（女子）	卒業生	三浦　里佳子	6 位
	4 年	柿市　衣里奈	
	4 年	田中　綾帆	
	4 年	中田　萌	
	3 年	高橋　綾佳	
	2 年	小川　沙希	
シンクロ	4 年	糸山　真与	コンビネーション　銀メダル、チーム　銀メダル
	4 年	箱山　愛香	
サッカー（男子）	4 年	菊池　俊介	銅メダル
サッカー（女子）	4 年	嶋田　千秋	5 位
	2 年	植村　祥子	
	2 年	後藤　亜弥	
バレーボール（男子）	3 年	山田　脩造	銅メダル
バレーボール（女子）	卒業生	中村　亜友美	5 位
体操競技（女子）	2 年	永井　美津穂	女子団体　銀メダル、個人総合 11 位
	1 年	兎澤　静	女子団体　銀メダル
新体操	大学院博士前期課程	穴久保　璃子	個人総合　26 位
バスケットボール（女子）	4 年	小菅　由香	13 位
レスリング	卒業生	射場　大地	男子 60㌔級　2 回戦敗退
	卒業生	音泉　秀幸	男子 66㌔級　3 回戦敗退
	卒業生	田野倉　翔太	男子 55㌔級グレコロ - マンスタイル　銅メダル
	4 年	森下　史崇	男子 55㌔級フリースタイル　銅メダル
サンボ	4 年	高森　泰孝	男子 82㌔級　5 位
	2 年	荒木　将徳	男子 57㌔級　1 回戦敗退
ウエイトリフティング	4 年	山本　俊樹	男子 77㌔級　11 位
	2 年	艾　幸太	男子 56㌔級　7 位
フェンシング	3 年	堀川　こず恵	個人エペ　36 位
柔道	卒業生	木戸　慎二	男子 60㌔級　金メダル、団体　金メダル
	卒業生	下和田　翔平	男子団体　金メダル、　男子 90㌔級　2 回戦敗退
	4 年	高上　智史	男子 66㌔級　金メダル
バドミントン	4 年	星野　翔平	男子ダブルス　準々決勝敗退、混合ダブルス　準々決勝敗退、団体　6 位
	4 年	熊谷　早也佳	女子ダブルス　準々決勝敗退、団体　6 位
	3 年	竹内　義憲	男子ダブルス　準々決勝敗退、団体　6 位

役員等

種目	所属等	氏名	参加区分
本部	卒業生	山﨑　貴子	本部員（競技・記録担当）
陸上競技	卒業生	磯　繁雄	コーチ
	卒業生	米田　勝朗	コーチ
水球（男子）	教員	大本　洋嗣	チームリーダー
	卒業生	本宮　万記弘	監督
水球（女子）	卒業生	大井　恵滋	コーチ
	卒業生	岡田　隆	トレーナー
サッカー（女子）	卒業生	中瀬　晴彦	総務
テニス	卒業生（大学院）	宮地　弘太郎	監督
ボート	卒業生	武良　誠	コーチ
バレーボール（男子）	教員	山本　健之	コーチ
体操競技（男子）	卒業生	中島　啓	トレーナー
体操競技（女子）	教員	瀬尾　京子	コーチ
体操競技（男子）	大学院博士後期課程	水鳥　寿思	監督
体操競技（女子）	卒業生	室畑　吉見	帯同審判
レスリング	卒業生（大学院）	多賀　恒雄	総監督
	卒業生	西口　茂樹	グレコローマンスタイル監督
	卒業生	栄　和人	女子フリースタイル監督
	教員	松本　慎吾	グレコローマンスタイルコーチ
サンボ	柔道部コーチ	松本　秀彦	監督
柔道	教員	山本　洋祐	チームリーダー
バドミントン	卒業生	宮崎　重勝	チームリーダー
	卒業生	今井　紀夫	コーチ
	教員	大束　忠司	コーチ
	卒業生	竹下　ひとみ	トレーナー
ラグビー（女子）	卒業生	浅見　敬子	監督

新任教員紹介&メッセージ

今年度9名の新任教員が着任しました。その素顔を紹介します。

教育現場、行政などで豊富かつ幅広い経歴をお持ちの先生方ばかりです。学生へのメッセージとともに、研究テーマから人柄（こんな人＝学生時代の思い出、趣味・特技など）、座右の銘まで、個性あふれるコメントをいただきました。好奇心と積極性を発揮し、先生方から多くのことを吸収しよう。

①最終学歴 ②出身地 ③研究分野 ④こんな人 ⑤座右の銘

素晴らしい能力を発揮してほしい

角屋 重樹（かどや しげき） 理科教育研究室 教授

スポーツをする人は、素晴らしい能力があります。勉学においても、集中力や忍耐力など、持てる力を転移できる場面が多いはずです。将来かかわる子どもたちのために最大限に発揮してほしいと思います。理科や生活科の面白さを味わうことのできる授業をめざします。

①最終学歴：広島大学大学院教育学研究科博士課程教科教育学（理科教育専攻）単位取得満期退学　博士（教育学）
②出身地：三重県
③研究分野：教科教育学。理科教育学「教育課程の開発」「教員養成のためのカリキュラム開発」。
④こんな人：趣味はおいしいものを食べること。ただし、太ることを避けるため散歩も趣味に加えています。学生時代は遊び過ぎ（？）。そのため大学院では懸命に勉強しました。
⑤座右の銘：何事にも「最善を尽くす」

子どもたちから好かれる先生に！

島田 功（しまだ いさお） 算数科教育研究室 教授

明るくて、スポーツが好きで、熱心に教えてくれて、子ども一人一人をよく見てくれて、そして一緒に遊んでくれる先生が子ども達から好かれる先生です。日体大の皆さんなら必ずそんな先生になれるはず。先生としての心構えや算数を学ぶ楽しさを伝えていきたいです。

①最終学歴：岐阜大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修了　修士（教育学）
②出身地：埼玉県生まれ、山形県育ち
③研究分野：算数・数学教育「算数教育における価値観の指導に関する研究」。指導法や子どもに算数が好きになってもらうための様々な研究・著作を行っています。
④こんな人：苦学生でアルバイトをしながら自分で学費を貯め大学を卒業しました。いま気になっているのは健康。階段で研究室に行ったり、休日には散歩をするようにしています。
⑤座右の銘：生涯勉強

強く頼もしく、優しい先生を育てたい

猪瀬 武則（いのせ たけのり） 社会科教育研究室 教授

高校教員時代、日体出身の体育の先生は、皆、気が優しくて、頼りになる方々ばかりでした。日体大生の印象も同じ。勉学にはハードヘッドで、理知的に。弱者へは優しい思いやりのソフトハートを大切に。楽しく学べるワークショップ型授業をぜひ習得してください。

①最終学歴：宇都宮大学大学院教育学研究科修士課程修了　博士（教育学）
②出身地：栃木県
③研究分野：社会科教育・経済教育。社会科教育において、無味乾燥な「暗記教科」ではなく、「身体的理解」をめざすワークショップ型授業を研究・実践しています。
④こんな人：アップルコンピュータが好きで、30年来のユーザー。これまで26台購入。学生時代は平凡な文系学生で、テニスやスキーを楽しんでいました。上達しませんでしたが（笑）。
⑤座右の銘：ハードヘッド、ソフトハート（アラン・ブラインダー）

チャレンジ精神を持った人に

三好 仁司（みよし ひとし） 教育学研究室 教授

素直で純真な学生が多いと感じています。特にスポーツに対する真剣な姿勢には感心します。仕事の世界は実力勝負、スポーツと同じです。将来に向け、難しいからおもしろい、自分がやらねば誰がやる、そのようなチャレンジ精神を持った人間に育ってほしいです。

①最終学歴：広島修道大学人文学部英語英文学科
②出身地：愛媛県
③研究分野：教育学、生徒指導。わかりやすい授業を目指します。失敗から学んだ多くの教訓も、授業を通じて伝えたいと思います。
④こんな人：若い頃バイクが好きでした。商社マンになろうと思っていましたが、ある先生との出会いがきっかけで教師になりました。いまの趣味は読書と多摩川沿いのジョギング。
⑤座右の銘：われ以外みなわが師

新任教員紹介＆メッセージ

学ぶ意欲の高さがうれしい

白旗 和也（しらはた かずや） 教職教育学研究室 教授

学ぶ意欲が旺盛な学生が多いと感じています。授業で全ての学生に「今、一番がんばっていること」を聞きましたが、全員しっかりと語ってくれました。常に自分を振り返り課題を見つける意識、将来に向けた明確なビジョンを持ち、チャレンジを続けてください。

①最終学歴：東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程保健体育専攻体育科教育コース修了　修士（教育学）
②出身地：長野県生まれ
③研究分野：「学習指導要領に基づいた体育科教育の充実」に関することが研究の主要テーマ。文部科学省の教科調査官は、学習指導要領を作成、周知、管理するのが仕事でした。
④こんな人：学生時代は野球をしていました。1番、ショートが小学校以来の定位置です。変わったところでは、生物の甲虫類には自信があります。いまはスポーツにも挑戦中。
⑤座右の銘：「道に迷ったら、楽しそうな道を選べ」ただし、「楽しい道」とは「楽な道」とは違います。

本を読まなきゃ！と思える講義を

関根 正美（せきね まさみ） スポーツ哲学研究室 教授

日体大は活気のある大学で伝統を感じます。世界のスポーツ文化を担っていく気概を持って、勉強と競技に打ち込んでください。学部では「やばい、本を読まなきゃ」と思ってもらえるような、大学院では、スポーツの未来像を描いてもらえるような講義をめざします。

①最終学歴：筑波大学大学院博士課程体育科学研究科体育科学専攻単位取得満期退学　博士（体育科学）
②出身地：栃木県
③研究分野：スポーツ哲学。金メダリストの哲学者であるハンス・レンクの思想を中心に研究してきました。日体大ではオリンピック哲学の研究も新たに始めたいと思っています。
④こんな人：学生時代は卓球部でした。日体大と試合をしたこともあります。そのほか、一時期、競馬の研究も。村上春樹さんの作品は学生時代からリアルタイムで読んできました。

体育教員への期待が高まっています

後藤 彰（ごとう あきら） 教職教育学研究室 准教授

日体生と言えば「質実剛健」。何事にもチャレンジし、自己の目標に向かって真っ直ぐに進んでください。教育現場での経験や研究してきた内容をすべて伝えます。学校現場では、体育の教員への役割や期待が益々高まっています。必要な能力や資質を磨いていきましょう。

①最終学歴：日本体育大学体育学部体育学科
②出身地：東京都
③研究分野：中学校保健体育科の評価。球技指導における指導法の工夫。教育政策の企画・立案。教育行政、人事行政。教員や行政の経験を活かし現場に即した研究を行っています。
④こんな人：スポーツと音楽に夢中になっていました。好きな音楽はサザンオールスターズからエリックラプトンまで幅広い。ギタリストをめざしていたこともありました。
⑤座右の銘：努力は必ず報われる

知的な刺激を与えうる演習・講義を

今野 哲（こんの あきら） 文学研究室 准教授

明るく快活な学生が多いという印象です。どうかその美質を失わず、手応えのある充実した学生生活を送ってください。〝国語〟の立場から言えば、皆さんの母語の運用能力を高めたい。そのためには幅広い知識・教養が必要であり、知的好奇心を刺激していきたいです。

①最終学歴：二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学　修士（文学）
②出身地：宮城県
③研究分野：日本文芸学の立場から日本近代文芸の研究に携わっています。現在の研究対象は芥川龍之介作品・室生犀星作品・尾山篤二郎作品など。教材論を中心に国語教育も研究。
④こんな人：学生時代は「劇研＋ゼミ」に没頭。うっかり劇研に入部したら、厳しい稽古の毎日。その反動でゼミが楽しくてしかたがない。大学4年間で芝居を10本上演しました。君子は豹変す（ただし3日くらいでコロコロ変わります!?）
⑤座右の銘：

食と栄養の大切さを伝えたい

安達 瑞保（あだち みずほ） 栄養教育学研究室 助教

児童スポーツ教育学部の幼児・初等教育を担う学生の皆さんや、体育学部の教員、アスレティックトレーナーを志す学生の皆さんに、栄養学、食育の授業を行うことは、楽しくもあり、責任を感じています。様々な形でスポーツや健康に携わる日体生に期待しています。

①最終学歴：共立女子大学大学院家政学研究科食物学専攻修了　修士（家政学）
②出身地：鳥取県
③研究分野：アスリートのコンディショニングにおける栄養サポート、アスリートに対する効果的な栄養教育方法。日体大スポーツ局で医・科学サポートスタッフを務めてきました。
④こんな人：現職をめざしたきっかけは、高校の生物の授業で栄養に興味を持ったこと。趣味はスポーツ観戦、海外旅行、絵画鑑賞。海外旅行では現地のスポーツドリンクの収集も。
⑤座右の銘：天知る　地知る　己知る

体育科学をリードする
～大学院・研究科の取り組み～

2

“体力”という言葉が生んだ誤解 すべての子どもを元気にするために

<体育科学研究科　博士前期課程　体育実践学コース　スポーツ教育・健康教育学系>

体力がない、元気がない子どもたちが多いと大人たちは心配する。しかしながら、有効な対策は見い出されていない。問題の本質はどこにあるのか。野井真吾教授は、一貫して「子どものからだと心」について研究を続けている。子どもを間近で感じたり、現場の先生方と深く交流したり、研究室はアクティブな活動を展開している。その様子を聞いてみた。

PROFILE

野井真吾 教授

日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了。博士（体育科学）。東京理科大学専任講師、埼玉大学准教授を経て現職。学校保健、教育生理学、発育発達、体育学を専門領域として、子どもの“からだ”にこだわった研究を続けている。博士前期課程（修士）「スポーツ教育・健康教育学系」、博士後期課程（博士）「健康科学・スポーツ医科学系」にて指導にあたる。

子どもの体力が心配。ところで“体力”って？

―先生の研究テーマについて教えてください。

日体大を卒業後、保健体育教員として現場で子どもたちに接していました。そこで、子どもたちの“元気のなさ”が気にかかり、日体大大学院で再び勉強しようと思ったのです。それ以来、「子どものからだと心」について研究を続けています。

子どもの体力が心配と言われますが、本当のところはいったいどういうことなのか。文部科学省のスポーツテストの結果を見ると、必ずしも数値が下がっているわけではありません。しかし、子どもの体力が落ちているという実感は、世間にもあるし、自分も感じています。この実感と事実のズレについて、博士論文で研究しました。

研究をすればするほど、やっぱりおかしい、実感していることと事実にズレがあるという思いが強くなりました。ふつう大人が子どもたちの体力を心配する時に、筋力が足りない子とか、持久力が足りない子を思い描いてはいないでしょう。むしろ、顔色が悪い子、疲れやすい子、元気がない子といったようなことをイメージして、最近の子どもたちは“体力がない”と危惧しているのではないでしょうか。

―つまり、そこにズレがあるということでしょうか。

スポーツテストに反映されるような“体力”、つまり筋力、敏捷性、柔軟性、持久力といった、持っている体力を外界に向けて発揮していくようなものを「行動体力」と呼びます。

一方で、外界からの刺激に対する反応、例えば、暑いときに汗をかくという反応は自律神経の働き、細菌やウィルスに対する反応は免疫系の働き、ホルモンバランスを一定に保つという反応はホルモン系の働きが担っています。こういったものも、一般に“体力”と呼んでいるわけです。風邪をひいた時に“最近体力がなくなった”と言うでしょう。これは、筋力でも敏捷性でも柔軟性でもありません。

後者の“体力”を「防衛体力」と呼びます。こうした身体的要素（「防衛体力」「行動体力」）に加え、意思や意欲（やる気）といったような精神的要素も影響します。病は気から、という言葉もそうです。つまり、身体的要素は精神的要素と深い関係を持ちつつ、全体として“体力”と呼ばれているわけです（資料①）。

―スポーツテストで測定しているものは、私たちがイメージする“体力”とは違うわけですね。

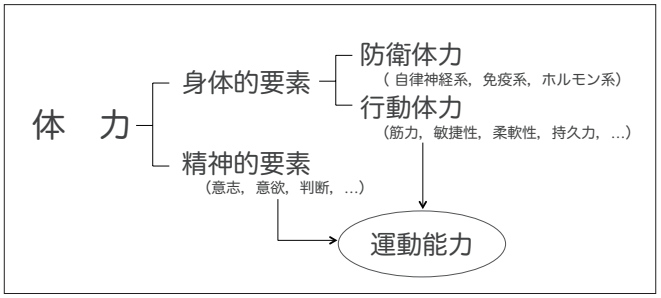
この体力要素の分類は古くから行われていて、すごく納得感があるでしょう。スポーツテストでは、「行動体力」と、精神的要素を合わせて「運動能力」のようなものを測定しているのです。「行動体力」と「運動能力」の関係はわかりにくいと思います。簡単に言うと、垂直跳びは「行動体力」の要素で、走り幅跳びは「運動能力」の要素です。その場でどこまで高く跳べるかというのは単純に瞬発力だけの問題であり、一方で走ってどこまで跳べるかというとある運動の場面でのパフォーマンスの優劣と理解できます。専門家の間では、この「行動体力」と「運動能力」は分けて考えられていますが、スポーツテストでは両方を測っています。いずれにしても、この「行動能力」はそんなに低下していません。

―それでは、「防衛体力」に問題があるのでしょうか。

最近は、低体温傾向やアレルギーを持つ子どもが増えました。つまり、自律神経系や免疫系が、だいぶかく乱されてきているということです。ホルモン系も同様です。調べていくと、心配なのは「防衛体力」であることがわかってきました。

もともと体育学から始まり、はじめは現場の保健体育教員として子どもの“体力”を心配し

資料①：体力要素とは



ましたが、こうした自律神経系や免疫系の問題が明らかになると、だんだんと養護教諭の方々とのコラボレーションも増えてきました。子どものからだの現状に合わせて、研究テーマが少しずつ変遷し、必然的に今の専門にたどりついたというわけです。心配な実態ばかり出てくるので、研究を続けてきたということでしょうか（笑）。突き詰めれば、子どものからだと心をどうやって元気にするかがテーマです。皆が何となく実感してきたことのデータを集め、問題を可視化するという試みでした。

―実際、教育現場ではどのような対応がされているのでしょうか。

保護者会を開けば、〝体力〟が心配という声があちこちから聞かれます。部活動を指導する先生方も同様です。部活をやっていれば総じて〝体力〟が高いはずですが、それでも心配だと言う。そこで、焦って何が行われるか。明日から縄跳び、マラソンをやりましょうと。問題は「行動体力」ではないのです。

実は、子どもの〝体力低下〟の問題は1960年代頃から指摘されています。高度経済成長の中でオートメーション化が進み、運動不足、集中力の低下などが懸念され始めました。しかし、これだけ科学が進んでいるにもかかわらず、半世紀以上も心配が払拭できないのは、始めに〝体力〟についての誤解があったからだと思います。〝体力〟という言葉が便利だったからでしょうか。いわば問題を明らかにすることが私の仕事でした。そうしなければ有効な対策を立てることはできませんし、結局近道だと思っています。

―「防衛体力」が低下してきた要因としてどのようなことが考えられますか。

やはり社会の現代化でしょう。例えば、エアコンがない時代は、暑さという刺激に対してそれを調整する「防衛体力」が働き、次第に発達しました。また、社会が清潔志向になったことがアレルギーを増やしたとも言われています。あくまで推測の上でのデータですが、2017年までに世界人口の半分が電磁波過敏症になるという報告もあります。

一方で、社会がこれだけ便利になっても「行動体力」はそれほど落ちていない。日本の学校体育はすごいのです。繰り返しますが、「防衛体力」、あるいは精神的要素が課題であり、それをどうやって育てるかということが重要です。

早寝、早起き、朝ごはんで〝体力〟を取り戻せ

―研究室の活動についてもう少し詳しく教えてください。

やはり、現場の先生方との交流が欠かせません。協働による学習会はもちろん、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校をフィールドにデータを収集し、分析・研究を行っています。そこでは、大学院生たちが大いに活躍しています。

―どのようなデータを収集するのでしょうか。

例えば、子どもの自律神経がどういう実態か。自律神経は緊急事態の時に交感神経が作動します。緊急事態を人為的に作って、その時の様子を確認すればいいわけです。そこで、私たちは氷水を緊急事態に見立てて、子どもたちにそこに指を入れてもらって血圧を測定します。交感神経が作動すれば、血圧が上昇します。緊急事態に正常に血圧が上がって、回避したら下がるか、それを調べるわけです。

―そのほかの研究についても教えてください。

栃木県の自然体験施設で、夏休みに「ガキ大将の森キャンプ」というプログラムが行われています。30日31泊というびっくりするような日程です。この団体から委嘱されて、子どもたちの体調変化を測定しています。早寝、早起きで子どもたちが元気になるかということを検証するものです。具体的には、眠りのホルモン（メラトニン）の量を測定します。これは、唾液を収集して行います。

まず、キャンプ参加前の測定では、メラトニンは夕方まであまり出ず、夜9時半になると少し出てくる。朝になって、6時にはもっと出ている。つまり、朝、眠いということです。同じことをキャンプ2日目の夕方から3日目の朝にかけてやってみると、夜9時半頃にきれいにピークが現れてくる。しっかり眠くなって床に就いているということです。15～16日目になると、ピークが夜9時半に現れるだけではありません。朝、メラトニンの量が抑えられています。3日目と16日目を比べると、個人差も小さくなっています（資料②）。

―つまり、早寝、早起きで、元気が回復するということですね。

今の子どもたちは元気がない、不健康と言われていますが、実はそんなことはありません。キャンプのような環境さえ整えれば、明らかにリズムが整って、元気になるのです。キャンプのような環境とは、日中に光を浴びること、そして体を動かすことです。夜は少し暗いところで過ごすと、日中貯めたメラトニンのもとのようなものがどんどんメラトニンに変換されていきます。そうすると早寝ができる、早起きになる、お腹もすいて朝ごはんも食べられる、元気になるということです。

しかし、残念ながらキャンプを終えた1ヶ月後に測定すると元に戻ってしまうのです。ふだんの生活で実践するのはむずかしいことです。いわば、子どもたちの元気を奪ってしまっているのは大人たちかもしれません。

子どものために自分を高める

―最後に大学院で学ぶ面白さ、学生へのメッセージをお願いします。

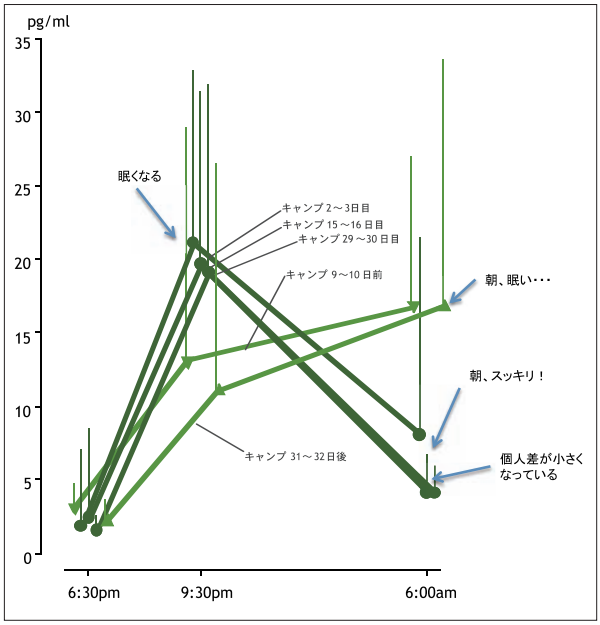
研究では、現場の先生とのコラボレーションがとても多いです。子どもの様子がよくわかりますし、研究とそれを活かす場面が非常に近いことが「スポーツ教育・健康教育学系」の魅力でしょう。子どもを感じながら研究することができます。

私自身、学部を卒業してすぐに中学校・高校の現場に立ちました。しかし、現場に出てみたらもっと勉強がしたくなりました。自分の力をもっと高めないと子どもたちに対応できないと思ったのです。そこで、大学院に進みました。

私の場合は20年も前の話ですが、今はもっと子どもたちは変化して、教科書で学んだことだけでは説明つかないことも多いのではないでしょうか。この変化にどうやって対応していったらいいか。どうやって子どもを理解したらいいか。そのためには大学院での学びは非常に有益です。

子どものために自分を磨く。そういう気持ちで大学院に来てもらえたら嬉しいです。私も含めて、ずっと学び続けていないと今起きている問題に合致した子どもの元気に役立つ研究はできません。一緒にそういう勉強がやっていきたいと思います。子どもの元気のために一緒に活動しましょう！

資料②：長期キャンプ（30泊31日）とメラトニン代謝



・資質を評価する入試制度を目指して

平成26年度入試が本格スタート

高等教育を取り巻く環境が厳しさを増す中、本学は2年連続で志願者増（平成24年度：前年度比114％、平成25年度：同119％）となった。本学の伝統を堅持しながらも、時流に合わせた様々な取り組みを積極的に進めてきた結果と言える。平成26年度入試においても、スポーツを軸にしつつ多様な能力や資質を備えた新たな受験者層を掘り起こす試みを行っていく。荻浩三アドミッションセンター長に平成26年度入学試験の概要を聞いた。

荻　浩三
アドミッションセンター長

体育学部AO入試一次選考方法の変更と児童スポーツ教育学部にAO入試を新規導入

体育学部AO入試（学科AO入試、地域ブロックAO入試、併設校AO入試）の一次選考で、これまでの「模擬授業」を廃止し「総合考査」を導入します。具体的には、スポーツに関するグラフなどの図表を提示して、それを分析・考察し論述するという内容です。データを正確に読み解く力、その数値が示す意味（社会的背景）まで含めて考察する力、そしてそれを丁寧に文章で伝える力を評価するものです。また、児童スポーツ教育学部でも、平成26年度入試よりAO入試を新たに導入し、進学目的の明確な受験生を積極的に迎え入れます。一次選考では体育学部同様、「総合考査」を実施します。

AO入試の目的は、志が高く意欲溢れる学生を確保することです。これまでも論述や面接、グループディスカッションなど多角的に人物評価を進めてきましたが、さらにその精度を高めていこうと、「総合考査」を導入しました。同じく、出願書類のひとつである「課題論文」では、是非、その存在を知っておいてもらいたい法律を手元に準備し、応えるよう指示しています。体育学部では「スポーツ基本法」を、児童スポーツ教育学部では「教育基本法」をそれぞれ取り上げ、これらが各学部における学修の大きな拠となることを出願時から意識してもらう狙いがあります。

一般入試選考方法及び出願期間の変更による多様な学生の更なる確保

体育学部の一般入試前・後期（A・B方式）の選考方法を変更します。A方式では、「筆記試験」と「実技試験」の配点を「2科目（国語、英語）200点」「2種目（50m走、上体起こし）100点」とし、その比率は2：1となります。学力試験のみの後期入試（B方式）では、前期同様、国語と英語の2科目（各150点）とし、試験時間は80分（センター入試と同時間）となります。

体育学部の場合、スポーツの実績に秀でた者（トップアスリートAO、スポーツ推薦）、意欲や情熱を持って高校生活に打ち込んだ者（学科・地域ブロックAOや指定校・一般推薦）、基礎学力を大きな武器に一般入試に臨んだ者が、ほぼ3分の1ずつ、バランスよく入学しています。さらに、その特徴を際立たせ、一般入試において高い学力を有した受験生を選抜できる仕組みにしていきたいという狙いから、選考方法の変更に踏み切りました。児童スポーツ教育学部では、2、3月にそれぞれ一般入試を実施することとし、優秀な学生の確保に努めます。

また、一般入試前期（両学部2月入試）の出願期間を平成26年1月6日～20日に変更します。大学入試センター試験後に出願締切日を設定することで、その手応え（自己採点）によって改めて本学に出願するチャンスが拓かれることになります。「スポーツ」や「子ども」に関わる学問分野に興味のある受験生を更に広く受入れることができる体制を整えていきます。

受験機会の拡大による志願者の増加、入学者の基礎学力も上昇

平成25年度入試では、志願者数が20％近く増加（体育学部4,841名、児童スポーツ教育学部418名）しました。言うまでもなく受験機会の拡大（とくに体育学部は最大5回）が大きな要因です。しかし、いくら入試日程が増えたからといっても、受験生が本学に対して相応の期待を抱いてくれなければ出願には至りません。その意味でも、志願者の増加は大変嬉しい結果です。実際に、学科AO入試、地域ブロックAO入試、一般入試と再々度出願し、最終的に合格を果たした受験生もいます。自分にあったチャンスを活かし、その強みを最大限に発揮してもらいたいと思います。

そして、さらに喜ばしいことは、入試の活性化が学生の基礎学力向上にも奏功している点です。昨年度から、すべての新入生に対して基礎学力テスト（国語・英語）を実施していますが、今年度入学者の結果をみると、昨年より平均点が上昇しています。各入試区分において、それぞれ期待する能力や資質を備えた受験生が選抜できていることのひとつの証ではないでしょうか。

社会や学生の期待が多様化し、それに応えられる学びや入試制度を整備

本学ではいま、入試制度はもとより、体育学部新教育課程の展開や児童スポーツ教育学部の開設など、「スポーツ」「身体」「生命」などをキーワードとする学びの領域を拡充しているところです。トップアスリート養成は本学の大きな使命ですが、決してこのことだけに注力しているわけではありません。将来の進路においても、教員はもちろんですが、本学学生の強みであるリーダーシップを遺憾なく発揮してビジネス界で活躍する、あるいは国際ボランティアとしてスポーツの指導や普及に携わるなど、さまざまな可能性がこの地球上に拓かれていると考えます。

得意不得意に関わらず、スポーツが好きであること、これは必須です。あとは、競技力に自信があればさらなる高みを目指せばいいし、それだけではなく、各自の興味や関心に応じてスポーツを学んでもらいたいと思います。政治や経済、教育、文化などについてスポーツを軸に語れるようになって欲しい。その意味で、スポーツをやっているから勉強は二の次だ、ということはありません。あたりまえの常識や教養が身についているからこそ、はじめてスポーツが私たちの強みとして輝いてくるのです。

体育やスポーツに少し距離を置く子どもからも好かれるような先生。あの人と一緒に仕事をしてみたいと思わせるような社会人、リーダー。本学を志す皆さんの将来の姿に大きな期待を寄せながら、今年度も入学試験がいよいよ本格スタートです。

受験機会の拡大と受験生の多様な能力

Topics 1 「飛び入学試験」を新たに実施

この他にも本学では、帰国生入試、外国人留学生入試、リカレント入試など、様々な入試制度 があります。今年度は更に、「飛び入学試験」（体育学部のみ）を実施します。その主旨は、既に高度なスポーツ技術（技能）を有し、多くの国際大会（オリンピック、世界選手権等）において顕著な成績を収めているアスリート（ユースエリート等）に対して、早期よりスポーツの実践的学修の機会を与 え、さらにその才能の一層の伸張（競技力の向上）を図ろうというものです。

Topics2 本学の「赤本」（入試過去問題集）が発刊

本年より本学入試過去問題集を「大学入試シリーズ（赤本）」として刊行しました。教学社のサイト及び全国書店はもとより、本学三省堂書店（世田谷・健志台）にて購入可能です。過去２年分（児童スポーツ教育学部は、H25年度のみ）の推薦入試・一般入試の問題が掲載されています。出題形式や頻出分野等の特徴をこの赤本で是非確認し、試験に臨んで下さい。

体育学部 AO入試・推薦入試と一般入試で チャンスは5回!!

チャンスは2回

スポーツの実績を評価

①トップアスリートAO入試

②推薦入試（スポーツ推薦）（Ⅰ期またはⅡ期のどちらかの出願に限る）

チャンスは2回

意欲や熱意、充実した高校生活を評価

①各学科AO入試

②地域ブロックAO入試（関東一都六県を除く）
または推薦入試Ⅱ期（一般推薦）

チャンスは3回

基礎学力、基礎運動能力を評価

①一般入試前期（A方式）
（筆記試験＋実技試験）
体育学科

②一般入試前期（A方式）
（筆記試験＋実技試験）
健康学科　武道学科　社会体育学科

③一般入試後期（B方式）
（筆記試験のみ）

児童スポーツ教育学部 AO入試・推薦入試と一般入試で チャンスは4回!!

チャンスは2回

意欲や熱意、充実した高校生活を評価

①学科AO入試

②一般推薦（推薦入試）

チャンスは2回

基礎学力を評価

①一般入試前期（2月入試）

②一般入試後期（3月入試）

平成26年度入試のおもな変更点

体育学部	★AO入試（学科AO入試、地域ブロックAO入試、併設校AO入試）の一次選考方法を「書類審査」＋「総合考査（90分）」に変更　※「模擬授業」を廃止 ※武道学科は「武道実技試験」を実施
	★一般推薦（推薦入試Ⅱ期）二次選考（小論文）の試験時間を80分に変更
	★一般入試前期（A方式）の選考方法を変更 ・「筆記試験：2科目200点」「実技試験：2種目100点」に配点を変更 ・筆記試験を「国語：国語総合（古典を除く）」「外国語：英語Ⅰ・Ⅱ」（2科目必須）に変更 ※「数学：数学Ⅰ」廃止 ・実技試験を「50m走（立幅とびの場合あり）」「上体起こし」（2種目必須）に変更 ※武道学科は「武道実技試験」を実施
	★一般入試後期（B方式）の選考方法を変更 ・筆記試験を「国語：国語総合（古典を除く）」「外国語：英語Ⅰ・Ⅱ」（2科目必須）に変更 ※「数学：数学Ⅰ」廃止 ・2科目とも試験時間を80分に変更
児童スポーツ教育学部	★AO入試（学科AO入試、併設校AO入試）の新規導入 選考方法：一次選考「書類審査」「総合考査」、二次選考「面接」
	★一般推薦（推薦入試）の募集人員を54名（9名増員）に変更
	★一般入試に前期（2月）・後期（3月）を設定 前期・後期とも、「国語：国語総合（古典を除く）」「外国語：英語Ⅰ・Ⅱ」（2科目必須）
	★帰国生入試、リカレント入試を実施
体育学部・児童スポーツ教育学部共通	★入学検定料のコンビニ払いの新規導入 ★一般入試前期（2月入試）の出願期間を変更　平成26年1月6日（月）～1月20日（月） ★一般入試前期・後期（2月・3月）ともに両学部の併願が可能で受験機会が拡大

オープンキャンパス日程（10:30～15:00　予約不要　入退場自由）

9/22（日）［横浜・健志台キャンパス］　12/1（日）［東京・世田谷キャンパス］

★大学案内に関する問合せ　東京・世田谷キャンパス　広報課　03-5706-0948（直通）
★入学試験に関する問合せ　横浜・健志台キャンパス　アドミッションセンター　045-963-7955（直通）

平成25年度［上半期クラブの主な大会成績］

学生支援センター 生活支援部門 調べ
4月～6月（7月以降は次号で紹介します）
情報は新聞各紙（日体大スポーツ含む）・インターネットからの抜粋

クラブ名	大会名	性別	種目	順位	氏名
■アーチェリー	リーグ戦2013	男子		優勝	
	王座決定戦	男子		優勝	
		女子		2位	
■アメリカンフットボール	関東学生アメリカンフットボールリーグ戦	男子		3位	
■ウエイトリフティング	全日本学生ウエイトリフティング選抜大会	男子	56kg級	2位	艾　幸太(2年)
		男子	77kg級	優勝	山本俊樹(4年)
		女子	75kg級	2位	栁川夏子(4年)
	全日本学生ウエイトリフティング個人選手権大会	男子	85kg級	優勝	山本俊樹(4年)
		男子	105kg級	2位	舟喜誠生(4年)
		女子	75kg級	優勝	栁川夏子(4年)
■カヌー	2013　カヌースプリント海外派遣選手選考会(兼)第23回府中湖カヌーレガッタ	男子	C-1-1000ＦＢ	3位	橋本厚平(4年)
		男子	K-1-1000ＦＢ	3位	野沢秀平（2年）
		男子	K-1-200ＦＢ	3位	内田享佑（2年）
		男子	C-1-200ＦＢ	5位	井澤一彰（2年）
		女子	WK-1-500ＦＢ	2位	角本麻衣（3年）
		女子	WK-1-200ＦＢ	4位	佐藤美鈴（2年）
		女子	WK-1-200ＦＢ	7位	角本麻衣（3年）
■剣道	第54回世田谷六大学学生新人剣道大会	男子	団体	2位	
		女子	団体	優勝	
■ゴルフ	平成25年度関東女子大学春季Ａブロック対抗戦	女子		6位	
■自転車競技	第53回　東日本学生選手権トラック自転車競技大会	男子	ポイントレース	優勝	倉林巧和（4年）
		男子	4kmインディヴィデュアル・パシュート	優勝	倉林巧和（4年）
		男子	4kmインディヴィデュアル・パシュート	4位	小林泰正（1年）
		男子	4kmチームパシュート	3位	
		男子	チームスプリント	3位	
		男子	タンデム250mフライングタイムトライアル	4位	
		男子	1kmタイムトライアル	2位	山内厚二（3年）
		男子	ポイントレースクラス２	優勝	小林泰正（1年）
		女子	500mＴＴ	優勝	小島蓉子(4年)
		女子	500mＴＴ	3位	斎藤　望（1年）
		女子	200mフライングタイムトライアル	2位	小島蓉子(4年)
		女子	200mフライングタイムトライアル	3位	斉藤　望（1年）
		女子	200mフライングタイムトライアル	4位	中村妃智（3年）
		女子	200mフライングタイムトライアル	5位	山田まい（4年）
		女子	3kmインディヴィデュアル・パーシュート	優勝	小島蓉子(4年)
		女子	3kmインディヴィデュアル・パーシュート	2位	中村妃智（3年）
		女子	3kmインディヴィデュアル・パーシュート	3位	斉藤　望（1年）
		女子	3kmインディヴィデュアル・パーシュート	4位	栁本愛奈（1年）
	第15回修善寺カップ女子オープントラック&レース	女子	総合	優勝	小島蓉子(4年)
		女子	総合	2位	中村妃智（3年）
	2days race in 木祖村2013	男子	総合	優勝	倉林巧和（4年）
	第52回全日本学生選手権チーム・ロード・タイムトライアル大会	男子	チームタイムトライアル	3位	
		男子	個人タイムトライアル	2位	倉林巧和（4年）
	全日本学生ＲＣＳ第３戦　第２５回全日本学生個人ロードＴＴ自転車競技大会	女子	個人タイムトライアル	優勝	小島蓉子(4年)
		女子	個人タイムトライアル	3位	中村妃智（3年）
■空手道	第41回関東学生空手道選手権	男子		ベスト16	森　優太(1年)
■柔道	平成25年度全日本学生柔道優勝大会	男子		5位	
■水泳(シンクロ)	シンクロジャパンオープン2013兼第89回　日本選手権水泳競技大会　シンクロナイズドスイミング競技	女子		2位	箱山愛香(4年)　糸山真与(4年)
■ソフトテニス	平成25年度関東学生ソフトテニス春季リーグ戦	男子	団体	2位	
		男子	ダブルス	優勝	巽　慎也（4年）　林田和樹(3年)
	平成25年度関東学生ソフトテニス春季リーグ戦	女子	団体	3位	
		女子	シングルス	ベスト4	上野彩花(4年)
		女子	シングルス	ベスト8	冨士原由紀(4年)
■ソフトボール	2013年第45回春季リーグ戦	男子		4位	
		女子		3位	
	第65回 全日本総合選手権 東京都予選	女子		優勝	
■体操競技	第52回ＮＨＫ杯	男子	個人総合	7位	神本雄也(1年)
■トライアスロン	第6回日本学生スプリングトライアスロン選手権渡良瀬大会兼2013全日本大学トライアスロン選抜大会	男子	個人	優勝	勝目　理(3年)
		男子	学生選抜団体	3位	
	第6回日本学生スプリングトライアスロン選手権渡良瀬大会兼2013全日本大学トライアスロン選抜大会	女子	個人	2位	奥脇早織(4年)
		女子	個人	3位	川添美佳(2年)
		女子	学生選抜団体	優勝	
■トランポリン	第4回都道府県対抗選手権大会	男子		優勝	田﨑勝史(4年)
■バドミントン	春季リーグ	男女	団体	2位	
■バレーボール	2013年度春季関東大学バレーボールリーグ戦	男子		優勝	
		女子		4位	
	第23回東日本バレーボール大学選手権大会	男子		2位	
■ハンドボール	平成25年度関東学生ハンドボール連盟春季リーグ戦	男子		2位	
		女子		4位	
	平成25年度春季ミニミニカップ	女子		優勝	
■フェンシング	2013年女子フルーレ全日本ランキングマッチ	女子		8位	森　美里（4年）
	第9回剛騎杯フェンシング選手権	男子	フルーレ個人	優勝	鈴木一平（2年）
		女子	サーブル個人	6位	小藤敦海（1年）
	第9回剛騎杯フェンシング選手権	男子		5位	山崎大知（2年）
	2013年度東京都シニアフェンシング個人選手権大会	女子	フルーレ	5位	砂山文香(3年)
	第66回関東学生リーグ戦	女子	エペ団体	優勝	
	全日本学生王座決定戦	女子	エペ団体	2位	
■硬式野球	2013首都大学野球春季リーグ戦	男子		優勝	
	第62回全日本大学野球選手権大会	男子		ベスト4	
■新体操	第46回東日本学生新体操選手権大会	女子	団体	10位	
■アルティメット・チーム	第18回東日本アルティメットフレッシュマンズカップ	女子		優勝	
■セパタクロー同好会	JOCジュニアオリンピックカップ	男子		優勝	
		男子		3位	
	第12回全日本ジュニア選手権大会	女子		優勝	
		女子		3位	

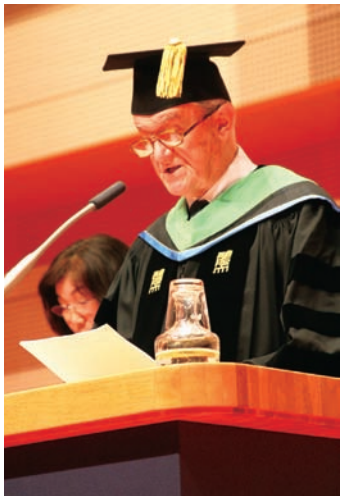
TOPICS

ブルーノ・グランディ国際体操連盟会長 名誉博士称号授与式・記念講演を挙行

平成25年4月8日、東京・世田谷キャンパス記念講堂にて、ブルーノ・グランディ国際体操連盟（FIG）会長への日本体育大学名誉博士称号授与式を挙行いたしました。今回で本学からの名誉博士称号の授与は8人目となります。

授与理由としては、東日本大震災の影響で開催が危ぶまれていた世界体操選手権東京大会について、FIG会長として東京開催の方針を変えず開催に尽力してくださったこと、大会期間中には被災地の体操クラブを訪問し、FIGを代表して子どもたちに励ましの言葉と見舞金を送ったことなど、「人類の平和」を目的とするスポーツ及び体操の推進に力を注いできた同氏を高く評価したことによります。

授与式終了後は、「体操界における優先されるべき今日的課題」をテーマに、ブルーノ氏による特別記念講演が行われました。



TOPICS

全日本学生剣道：村瀬 諒（武道学科・2年）が日体大史上初の優勝

個人の学生日本一を争う第61回全日本学生剣道選手権が7月14日、大阪・ボディメーカーコロシアムであり、本学武道学科2年の村瀬諒（日体荏原高出身）が初優勝しました。ノーシードからの快進撃で、決勝では延長戦の熱闘を制し、日体大勢として初の個人日本一に輝きました。また、7月16日、八木沢剣道部長と共に谷釜学長へ優勝報告を行いました。その後、母校の日体荏原高校にも足を運び、大石校長をはじめとする教職員、剣道部の後輩達に優勝報告を行いました。

TOPICS

2020オリンピック・パラリンピック開催都市決定 パブリックビューイングを開催しました

平成25年9月8日早朝、東京・世田谷キャンパス記念講堂にて、2020年オリンピック・パラリンピック開催都市決定パブリックビューイングを開催いたしました。これは、本学の建学の精神に基づき行ってきた招致活動の集大成を大学関係者及び近隣のみなさまと見届けようと開催されたものです。予想を大きく上回る約400人が一堂に集まり、大変な緊張に包まれた記念講堂でしたが、開催都市が東京に決定した瞬間、歓喜の渦となりました。深夜から早朝という時間帯にも関わらず多くの方にお越しいただくことができました。参加された方々には心より感謝申し上げます。これからの日体大の活動が注目です。

TOPICS

オリ・パラリレーセミナーを実施しました

平成25年7月31日（水）、東京・世田谷キャンパスにて、本学1年生を対象に「オリ・パラセミナー」を開催いたしました。この「オリ・パラセミナー」とは、東京オリンピック・パラリンピック招致運動の一環として、招致活動に賛同する大学がリレー形式でセミナーを開催するというものです。

本学では、1984年ロサンゼルスオリンピック体操競技個人総合金メダリスト、神奈川県教育委員会委員長でもある、具志堅幸司体育学部長が講演されました。

テーマは「本気になれば何かが変わる、選手として、指導者として」で行われました。ご自身が体験されたロサンゼルスオリンピック体操競技の映像により、その当時を振り返りその経験から得た話をしてくださいました。

TOPICS

日体大facebookページをオープンしました!

日本体育大学企画部広報課が運営する日体大facebookページがオープンいたしました。在学生や卒業生はもちろん、日体大を応援してくださっている様々な方々へ向けた学内の最新情報をお届けいたします。是非いいね! してみてください。

dot.NITTAIDAI 35
〔学報 NITTAIDAI（ニッタイダイ）〕 発行日●2013年9月20日
発行●日本体育大学／日本体育大学女子短期大学部 広報委員会 TEL 03-5706-0948 FAX 03-5706-0922 http://www.nittai.ac.jp/ 制作協力●(株)図書出版

［編集後記］2020年オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定。日体大でもパブリックビューイングを実施し、400名を超える参加者と開催地決定の瞬間を見守りました。IOC会長がTokyoと発表したときの、場内の興奮、そして高揚感は今も鮮明に覚えています。様々な社会問題が次の世代へと先送りされ、閉塞感漂う日本において、7年も未来のことをワクワクしながら語り合えるなんて、久しぶりではないでしょうか？ 奇しくも今号のテーマは「国際舞台への挑戦」。世界で活躍するOBや先生の話を聞いていると、世界へ羽ばたくために必要なのは、語学力や知識はもとより、日々新たなことに挑戦する気概と好奇心なのではないかと感じます。現状に満足せず、常に先を見据えて行動する。私も、恐らく東京オリンピックには出場できませんが、新たな仕事に挑戦する気持ちを忘れず、未来へ邁進したいと思います！（目の前に山積している日々の業務にとりあえず全力で目を背けながら）